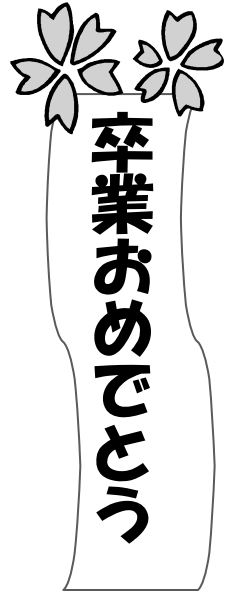


創学舎ニュース

No.280



卒業おめでとう

●今春も、小中高合わせて三〇〇人余の生徒が卒業を迎えた。塾としても、高三生のほぼ全員と、中三生の半分以上とは、とりあえずのお別れとなる。私は、きみ達の人生に幸多からんことを祈りつつ、この稿を書いている。

●受験生としては、不本意な結果に終わった人もいる。高三生の中には、もう一年やって捲土重来を目指す人も。そういう人も含めて、全員に言いたい。卒業おめでとう。これは本当にめでたいことなのだ。この卒業は、きみがここまで生きてこられたこと、そして一つの時期を乗り越え次の世界に踏み出すことを確かめる儀式なのだ。だから、みんなきみの卒業を祝うのだ。

●家族の関係がうまくいってなくて、きみの卒業を祝ってくれない親がいたとしても、それは親が、自分の心の整理が出来ていないだけだ。きみが生まれたときのこと、一緒に遊んで楽しかった日々のこと、心が疲れて、思い出せないでいるだけだ。自分で気付かないだけできみときみのことは思っている。ただし、きみのほうがもう少しの間辛抱する必要はある。



る。そして、できれば、きみが大きな人になれ。

●充実した学校生活を送れたと思っている人がいる一方、不登校の時期があったり、いじめにあったり、志望校に合格できなかったり、部活をやめてしまったり、友人に裏切られたり、つらい日々だった人もいるはず。でも、まだこれからの人生は長い。きみ達のその経験はきつとムダではない。いじめにあつた人はいじめられる人の気持ちが分かる。不合格を味わつた人は不合格の人の気持ちが分かる。それだけでも大きな財産だ。不登校もいじめも長い闘病も不合格もたつぷり味わつた私は、本当にそう思う。

●親に感謝し、友を大事に、健康に留意し、精一杯学び、心から打ち込めるものを見つけ、世の害になることはせず、志を高く、自分がなれる最高の自分になれ。また会う日のためにさようなら。

(小林(健))

知識と知恵

「知識」・「知恵」という言葉は日常よく使われています。しかし、本当にその意味が分かっているものでしょうか。塾生を見ていると、甚だ疑問です。辞書には次のように書かれています。

知識……ある範囲の事柄について知って(理解して)いることや内容。

知恵……物事の道理がよく分かり、判断・処理がうまくできる能力。

この二つの意味をしつかり認識して勉強していけないと、学力の向上は望めないでしょう。論語には、このことを「学(まな)びて思(おも)はざれば則(すなわ)ち罔(くら)し、思(おも)ひて学(まな)ばざれば則(すなわ)ち殆(あやう)し。」と端的に表現しています。今回は、この知識と知恵について少し述べてみたいと思います。

最近、知識偏重という言葉をよく耳にしますが、これは知識の追求にのみ終始して知恵を忘れたことに対する批判です。また、知恵という言葉のかわりに思考力という言葉がもてはやされています。しかし、知識のない思考力・判断力は独善に陥りやすいことを忘れてはなりません。もう一度論語を引用します。「学(まな)びて思(おも)はざれば則(すなわ)ち罔(くら)し、思(おも)ひて学(まな)ばざれば則(すなわ)ち殆(あやう)し。」



全くすばらしい言葉ではありませんか。二五〇〇年前に孔子が指摘したことは現在になっても通用する真理なのです。

それでは、このことを塾での勉強、あるいは家庭での勉強にどう生かしていけばよいのでしょうか。

順序からいけば、まず知識を身に付けることです。まず学ぶことです。先人が築いてきたことを模倣し、確実な知識とすべきです。中途半端ではダメです。入試に限定すれば、中途半端な百の知識より、確実な十の知識が得点につながることは明白な事実です。塾でノートの書き

方を指導したり、宿題を課したりする第一の目的はこのことにあります。



次に進むべき作業は、知識を基に、知恵を働かせる訓練です。言い換えれば有機的な思考をする訓練です。限られた知識で、

問題解決の方法を自分の頭で考えることです。頭が固いというのは一対一対応しかできないことをいうのです。公式の暗記にのみ終始している人はいませんか。その人は、物事を有機的に考えていく訓練が不可欠です。

我々は塾での授業を通して、生徒たちに、今述べた、知識と知恵をしつかりと植え付けていきたいと考え、実行しています。まだまだ我々の指導力も不足していますが、新学年の初めにあたり、知識と知恵の重要性を共に再認識し、今年一年頑張っていきましょう。

最後に、もう一度、確実な知識を身に付け、柔軟な知恵を駆使することが、入試には不可欠なことです。さらに、このやり方で受験勉強をすれば、受験勉強も方法論として今後の生活に生かせるはずです。

(村上)

「忘れられぬ一言」

●言葉は時に残酷である。「たった一言」が、その人を傷つけ、ぬぐい去れぬ記憶となったりする。本当は、そんな一言で傷ついてはならぬのだが、強くなるには時間がかかるのが常で、またそのた

めの方法も一般には手に入り難い。私自身も、他人からもらった一言を随分長くひきずって生きてきたが、いつか「どうでもいいや」と思えるようになった。これは、友人のお陰であり、書物のお陰である。一方で、振り返れば、間違いなく私の一言が相手を傷つけたはずだという場面がいくつもある。無意識の発言はきつと数多となつていよう。複雑な思いである。

●生徒を相手にしていると「傷つき易い」人がたくさんいる。傷ついてはならぬのだが、もつといえは傷つくのは未熟だからなのだが、そういう押し切るだけでは解決しない。といって私に決定打があるわけでもなく微力ながら本人の成長を祈りつつ、必ずあるはずの出口を探す手助けをするのみである。

●さて、言葉はまた、別の顔があつて、心をほぐし、生きる勇気を与えてくれることもある。「たった一言」が生きることを助けてくれる。私にも、そういう一言がいくつあつて、つらい時、苦しい時の支えとなつている。勝手に自分が大切にされていた、愛されていた証と思ひ込んでいただけかもしれないが、私にとってはかけがえのない言葉である。

●私がいつも心に留めている言葉のひとつは、父が別れの時に残したものである。もう、何回思い出したことだろう。もしかしたら、毎日毎日かみしめて生きていくのかもしれない。物心ついてからの父の記憶は全くない。二才のときに、父が仕事を求めて大阪へ行



つてから、一度も会うことはなかった。詳しくは、「愛の壁」に書いたが、祖父と母と弟との四人暮らしであった。その父が、私が八才の時に、一度だけ帰ってきたことがある。母と父の縁を結んだ仲人さんを入れての話し合いで、三時間余の滞在であった。父が帰ってきた理由、話し合いの中身は省くが、とにかく、その三時間余が記憶に残る唯一の時間である。話し合いが終わって、また父は大阪へもどることになった。ろくにあいさつも交わず、淋し気な笑顔(精いっぱい)の笑顔だったのだ)をもらつてお別れ。あの場面で八才の私に、いや父や母や祖父に、弟に何ができたのだろうか。みんな精一杯だった。しかし、これで終わっていたら、私の人生は少し淋しいものになっていただろう。家の木戸で別れたあと、夜汽車で帰る父をみんなで見送ることとなった。父は、そのことは知らない。父がどの車両にのつているのか分からないが、とにかく、その列車だけは見送りたい。ガタンゴトン・・・。ボーツ。ガタンゴトン・・・。近づくと列車を待つ。来た!どこだ!列車が通り過ぎようとしたその瞬間、窓から身を乗り出す人影があつた。

「ケンちゃん!シンちゃん!」私と弟の名を呼ぶ声がかこえた。父だ!私たちは、必死で手を振った。ガタンゴトン・・・。ボーツ。ガタンゴトン・・・。遠ざかる夜汽車の音と、空に満天の星・・・。大切な時をもらった。そして、



父が私たちの名前を呼んだこと。「ケンちゃん!シンちゃん!」この言葉はうれしかった。自分が、弟がそしておそらく母や祖父も父に思われているのだ。私にも父がいるんだ。

●それから二年余。父はこの世を去る。父とのことで私の側に思い残しはたくさんあるが、「ケンちゃん!シンちゃん!」これだけで父は、十分のことをしてくれました。感謝感謝である。ほんの少し歯車のかみ合わせが違えば、ずっと一緒に過ごせたかもしれない。しかし、私にとって時の長さはもはやどうでもよいこと。「あの夜」と「父の言葉」は、何物にもかえがたい私の宝物である。(小林(健))

脳が溶ける? (3)

●韓国から日本に来た留学生を何人か知っている。「何故日本に来たんですか?」と質問すると、「韓国の大学を出ても就職はありません」という返事。「日本の企業に就職して、その企業の韓国支社で働くのが願いです。私の仲間はみんなそうですよ。」それから、いろいろ話をきくと、韓国で就職できる大学生は五割。残りの五割は非正規雇用だという。日本の大学と比べれば、韓国の大学のほうはレベルが高く、学力も韓国の学生のほうがずっと上なのに、こういう状況である。日本がこれからどうなるか、私見は述べないが、韓国とはまた違った形で苦しい時期が続くことは十分に予想される。

●「そういう状況で、きみ達はどうすべきか?」これがこのテーマ(「脳が溶ける?」)で考えてほしいことである。部活をがんばり、友人と遊び毎日楽しく過ごすこと。これは大事なことである。だからやれ。そして一方で、生きるための準備をすること。これも同じくらい大事なことである。長い

人類の歴史の中でずっと子供時代も青年時代も生きるために必要な力を身につける時期でもあつた。それは今も変わらない。だから、今の年齢でやるべきこと、やった方がよいことはしっかりやっておいてほしい。学ぶこともその中の重要な一つで、その応援団が私達ということだ。きみ達が他人に対して冷たいのと同様に、社会はきみ達に冷たいということ。企業は二十二年間さぼってきた人間を拒否するということ。これは前号に書いた通りだが、就職は勿論、人として充実した人生を送るためにこそ、学んでほしいのだ。(以下次号) (小林(健))



新学舎他全国書店にて

好評発売中!!

▼▲継続希望の方へ▲▼

▶卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。

▶在籍していた教室までご連絡下さい。

創学舎の本

■愛の壁■

一お父さんお母さん
あなたの愛は子供に届いていますか
著者:小林 憲右
2006年5月1日発行(1,500円)